津和野町埋蔵文化財報告書

喜時雨地区埋蔵文化財
試掘調査報告書　Ⅱ

1997

津和野町教育委員会

喜時雨地区埋蔵文化財
試掘調査報告書　Ⅱ

目　次

Ⅰ．調査に至る経緯……1
Ⅱ．位置と歴史的環境……2
Ⅲ．調査の方法と経過……4
Ⅳ．調査の概要……4
Ⅴ．小結……18

例　言

1．本書は、１９９６（平成８）年度に国、県の補助金を得て津和野町教育委員会が実施した埋蔵文化財試掘調査の報告書である。

2．調査を実施した場所は、島根県鹿足郡津和野町大字田二穂、通称喜時雨地区である。調査所在地と小字名は第１表(Ｐ１７)のとおりである。

3．調査を実施した遺跡は、喜時雨遺跡である。

4．調査にあたっては、下記の方々にご指導いただいた。

梅光女学院大学　　渡辺　一雄　氏

島根県教育庁文化財課　　広江　耕史　氏

5．本書に用いた方位は、第１～４図は真北、その他の図は磁北である。

6．本書中に用いた記号ＴＰは、テストピット（試掘坑）の略号である。

7．テストピット実測図の縮尺は１／６０または１／４０である。遺物実測図のスケールは１／３とし、木製品の一部については１／６とした。

8．写真図版中の遺物番号は、遺物実測図の遺物番号に対応する。

9．調査に伴う記録類及び出土遺物は、津和野町教育委員会で保管している。

10．調査の体制は、下記のとおりである。

調査主体	山根津知夫	（津和野町教育委員会　教育長）	～1996.9.30.
	斉藤　数弘	（　〃　〃）	1996.10.1.～
事務局	益成　　馨	（　〃　教育次長）	
	広石　　修	（　〃　文化係長）	
	宮田　健一	（　〃　文化係）	
調査担当者	宮田　健一	（　〃　〃）	
調査員	永田　茂美	（　〃　嘱託）	
調査補助員	藤田みちよ	（　〃　臨時職員）	

外作業員　和崎定、和崎清子、竹岡保子、三東イヨノ、吉岡峯男、吉岡良子、斎藤ナツヨ、石井マツヨ、石井千代乃、石井タカ子、田村貞子、石井忠、益野巳之吉、生田徳太郎、藤井静子、舛成義一、舛成米子、堀トミル、石井信義、齋藤豊

調査協力者　田村亘敏、田村啓二、三東康佳、藤井康二、石井文恵、河野春男、齋藤豊、後藤博、石井信義、三浦美男、陶山晃、和崎登、竹岡祥一、益野巳之吉、斎藤栄、川戸弘喜、西村靖（以上、土地所有者）

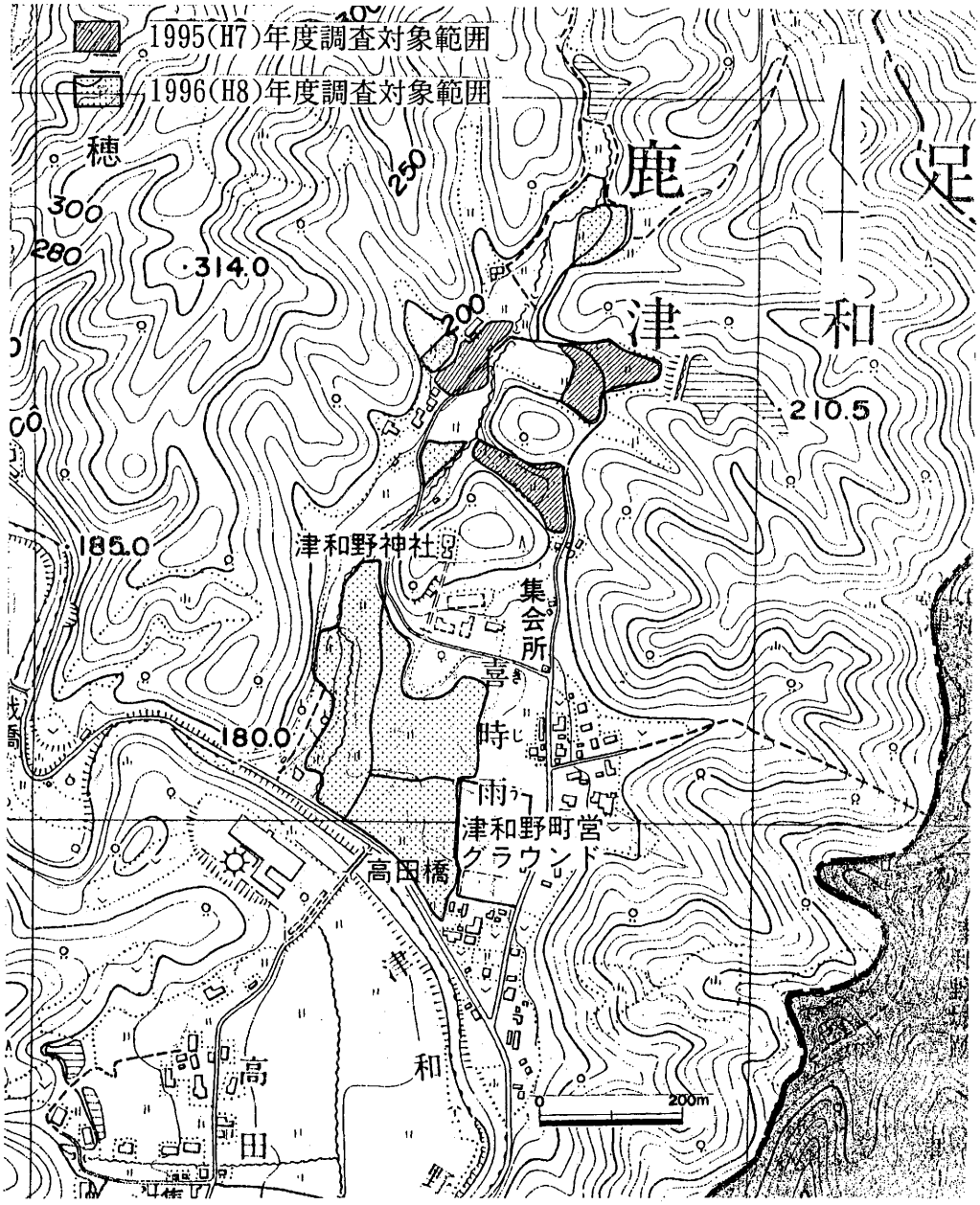
鹿足郡津和野町土地改良区、藤井康二（１９９６年度喜時雨地区嘱託）

ご協力いただいた皆様には、この場を借りてお礼申し上げます（敬称略）。

11．本書は永田の協力のもと、宮田が編集にあたった。

Ⅰ．調査に至る経緯

これまでに喜時雨地区では弥生土器等の採集がされており、周知の遺跡として知られてきた。１９８３年には、町民グラウンドの建設に先だって、町内では初の本格的な埋蔵文化財調査が行われている。この時の試掘調査及び追加調査では、一部で中近世の遺物、遺構の発見があった。



第１図　試掘調査対象範囲とその周辺（1/10,000）

ところで、町内では１９９７年度以来、各所でほ場整備事業が実施されてきた。喜時雨地区においても団体営ほ場整備事業が計画され、事業主体である鹿足郡津和野町土地改良区と津和野町教育委員会は、埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねてきた。そこで、事業計画地内の埋蔵文化財の分布状況を事前に把握し、保存についての措置を講じる必要から埋蔵文化財試掘調査を実施することとなった。１９９５年度には喜時雨地区北半について試掘調査をおこない、遺跡の分布状況を確認している。調査は、津和野町教育委員会の直営事業として、国・県の補助金を得て実施した。

Ⅱ．位置と歴史的環境

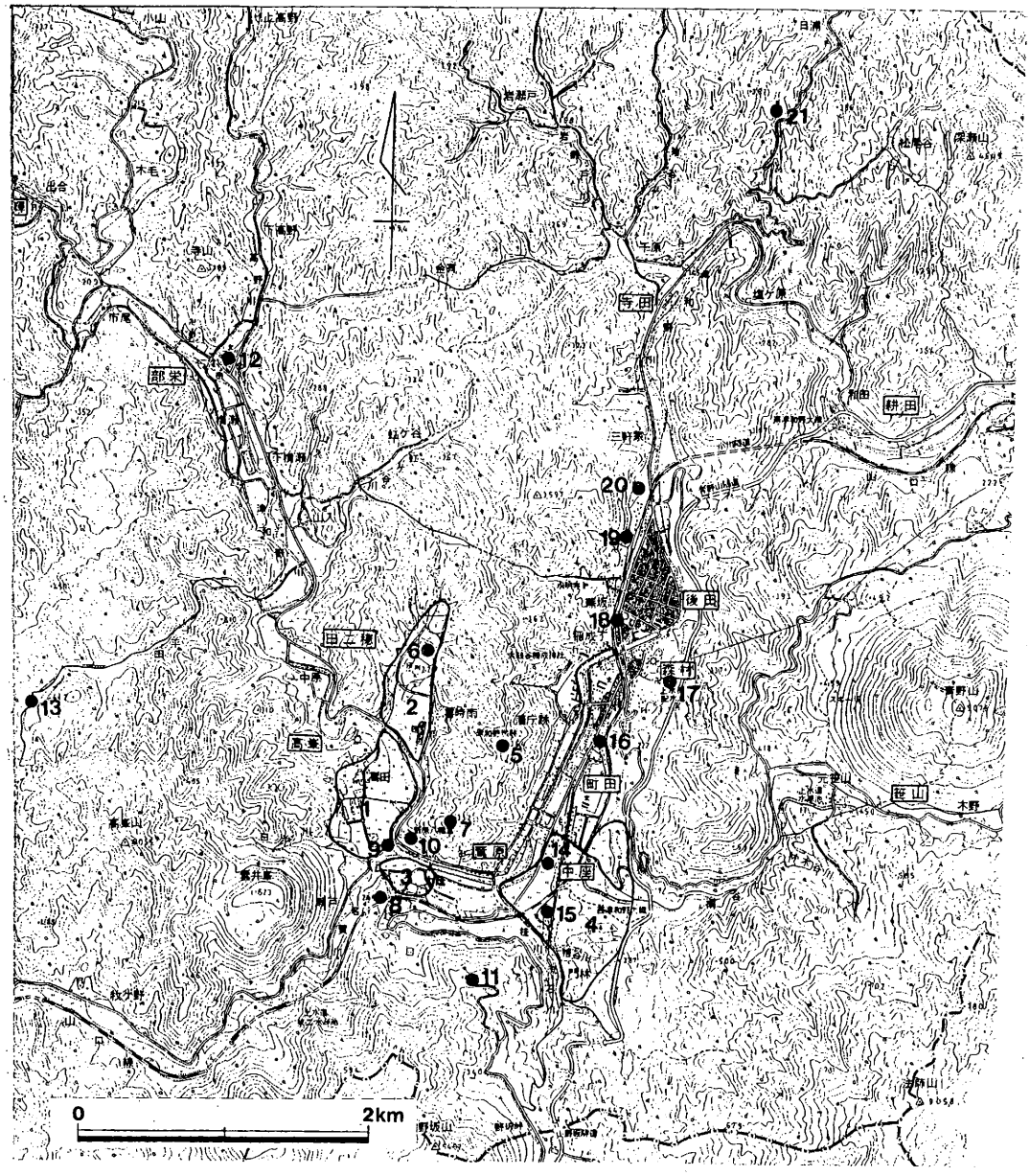
現在のところ津和野の歴史は縄文時代早期にまで遡り、高田遺跡（第２図**1**）、山崎遺跡（同図**15**）からは押型文土器が出土している。また、高田遺跡からは中期の阿高式、後期中頃の鐘崎式土器がまとまって発見され、対岸の大蔭遺跡（同図**3**）からは後期後半の西平式土器が採集されるなど、当時この地域が九州地方の情報の及ぶ範囲であったことが窺える。

弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけて集落が営まれていたことが高田遺跡で確認され、在地の土器群に混じって吉備地方から運ばれてきた外来の土器が発見されている。町内の古墳は、津和野川最上流の木部地区において鍛冶原古墳群が確認されているのみである。

高田遺跡からは奈良・平安時代の緑釉陶器、皇朝十二銭の一つ承和昌寶（８３６年初鋳）、大量の土師器、須恵器が発見されており、当時石見国鹿足郡能濃郷（元美濃郡鹿足郷）と呼ばれていたこの地域の重要な拠点が高田地区にあったものと思われる。

中世津和野の領主吉見氏は、弘安５（１２８２）年に元寇再防備のため能登国から津和野北部の木部地区に入り、その後１４Ｃ代に津和野城を構えたと伝えられている。文献では吉見氏入部以前の記録はほとんど残されていないが、これまでの高田遺跡の発掘調査では１２・１３Ｃ代の白磁が大量に出土しており、吉見氏入部以前に津和野地方に有力者が存在していたことが考古学的証拠によって明きらかになりつつある。中世の津和野城の大手口は近世以降の大手口とは反対側の喜時雨にあったと伝えられ、吉見氏の居館も同地に存在していたとするのが通説である。喜時雨地区には「本門口」「本門前」など館の存在を示唆する字名、「要害山」「幾久（戦）」など天文２３年（１５５４）年陶晴賢軍が津和野城を包囲した頃にさかのぼる字名、「吉見乳母の墓」と伝えられる石塔など中世の名残が各所に見受けられる。

関ヶ原の役後、吉見氏は毛利氏に伴い萩に移るが、その後坂崎出羽守の１６年間の治領となり、津和野城の大改築・城下町整備など現在の津和野の景観の基礎となる大事業が行われた。その後、亀井氏１１代２２５年間の治世を経て明治維新を迎えることとなる。



1.高田遺跡　2.**喜時雨遺跡**　3.大蔭遺跡　4.中座遺跡群　5.津和野城跡
6.要害山　7.中荒城跡　8.茶臼山城跡　9.伝吉見民部墓（宝篋印塔）
10.鷲原八幡宮　11.陶晴賢本陣跡　12.横瀬遺跡　13.田平の至徳３年銘宝篋印塔
14.西中組遺跡　15.山崎遺跡　16.森遺跡　17.丸山遺跡　18.山根遺跡
19.伝吉見正頼夫人墓（宝篋印塔）　20.伝吉見頼行墓（宝篋印塔）　21.日浦遺跡

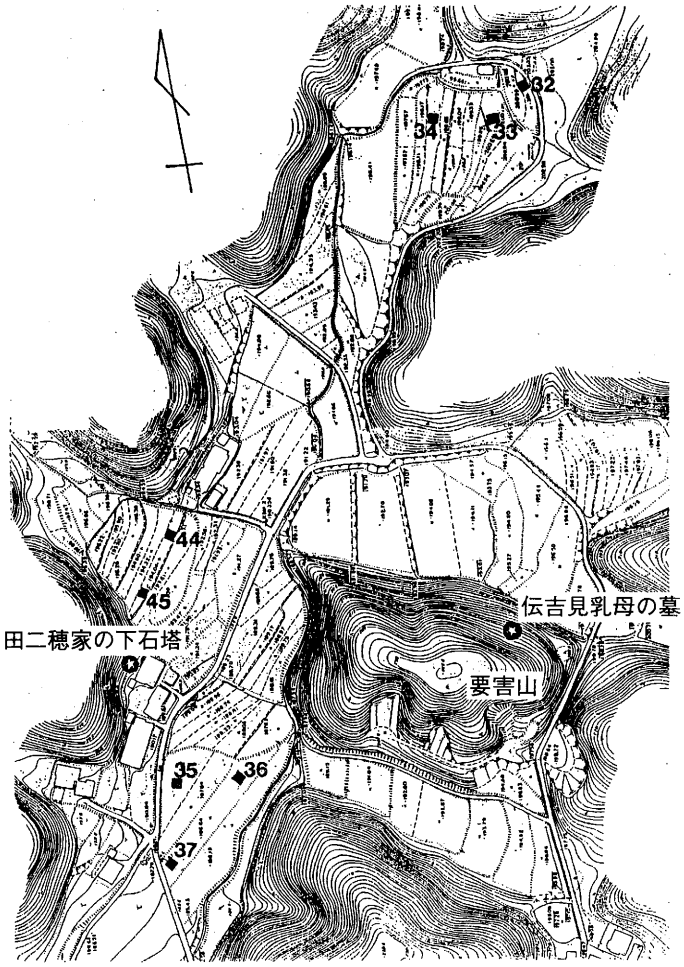
第２図　喜時雨遺跡の位置と周辺の遺跡分布図（1/50,000）

Ⅲ．調査の方法と経過

今後予想されるほ場整備の計画範囲を対象にして、合計６２ヶ所のテストピットを設定した。テストピット番号は昨年度の番号を継続して使用した。現地調査は発掘・実測作業を１９９７(平成９)年１月２３日～２月２０日、埋め戻し作業を２月２４日～３月１８日におこなった。

Ⅳ．調査の概要

ＴＰ３２～３４は喜時雨川の奥部、標高１９８～２０１ｍの地点に設定した。いずれの調査区も砂礫、砂、砂質土、粘質土が互層状にみられ、東方の谷から堆積したものと考えられた。遺構、遺物はない。ＴＰ３２の第７層およびＴＰ３３の第５～９層から杭先状に尖った自然木が出土した。



第３図　試掘調査区（北半）配置図（1/4,000）

ＴＰ３５～３７は標高１８６～１８７ｍの地点に設定した。以前、ＴＰ３５の西方の畑より五輪塔空風輪部（田二穂家ノ下石塔）が採集されていることから、関連する遺跡の存在が考えられた。しかしながら、出土遺物は近世以降の陶磁器が少量のみで遺構も発見されなかった。ＴＰ３７では耕作土下約７０㎝で褐色砂礫の地山となる。

ＴＰ３８～４３は喜時雨川の下流右岸に設定した。ＴＰ３８～４１では砂礫、砂、砂質土、粘質土、粘土が互層状にみられ、喜時雨川が過去に氾濫し堆積したものと考えられた。遺物はＴＰ４０・４１・４３で近世以降の陶磁器片が少量出土したのみである。遺構はいずれも発見されなかった。

ＴＰ４４・４５はＴＰ３５から１００ｍ程度さかのぼったところに設定した。昨年度試掘調査ＴＰ１６・１７で縄文時代後期の遺跡が発見されたことから、この遺跡の広がりを確かめることを主

な目的として調査した。調査の結果、遺構・遺物とも発見されず、縄文時代後期の遺跡はごく狭い範囲に限られることがあらためて確認できた。

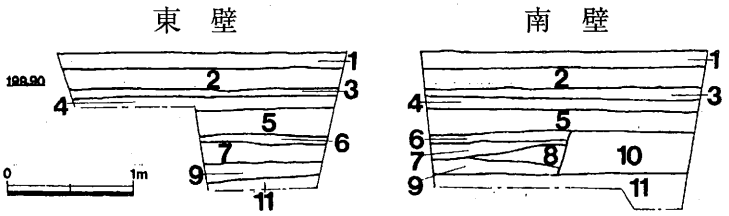
ＴＰ４６は喜時雨川が谷から平地に向けて流れ始めるあたりの左岸に設定した。喜時雨川と津和野神社の裏山にはさまれた狭い場所である。第５層中より弥生土器あるいは土師器とみられる土器片が出土した。調査区内では遺構は確認できなかった。出土遺物の中で図化が可能であったものは甕のみである。**１・２**は口縁部を横ナデし、体部には指頭圧痕が見られる。いずれも内傾接合の痕跡が確認できる。

ＴＰ４７はＴＰ４６より約５０ｍ南西に設定した。ＴＰ４６の田面より約２．５ｍ低く、喜時雨川の左岸に当たる。ＴＰ４６で見られた土器は発見されなかったが、杭先状の加工をした木製品が出土した。木製品は第８層褐色砂礫付近からの出土で、かなり深い層から出土していることからＴＰ４６出土遺物と同時期のものであるかもしれない。

第４図　試掘調査区（南半）配置図（1/4,000）

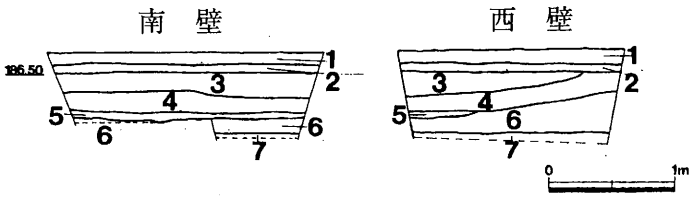
ＴＰ４８～５２は標高１８０～１８３ｍの地点に設定した。いずれも遺構はない。遺物はＴＰ５０で近世以降の陶磁器が少量発見されたのみである。ＴＰ４８・５１・５２では耕作土下約２０～３０cm程度で地山があらわれ、ＴＰ４９・５０では耕作土下約５０～８０cmで地山があらわれた。

ＴＰ５３は北東方向からのびる尾根最端部の直下に設定した。耕作土下約５０cmで非常によくしまった地山層にあたる。第３層暗灰



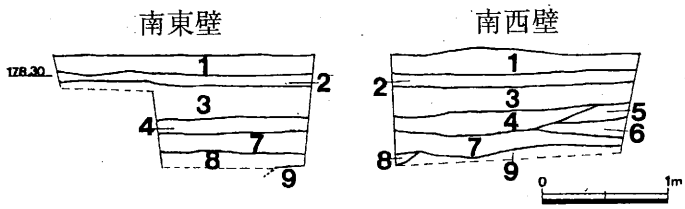
第５図　TP33（1/60）

1．耕作土
2．床土
3．にぶい淡黄灰色粘質土
4．暗灰色粘質土
5．灰色砂礫
6．淡灰色砂
7．暗褐色粘質土
8．淡灰色砂
9．黒褐色粘質土
10．淡褐色土
11．青灰色砂礫



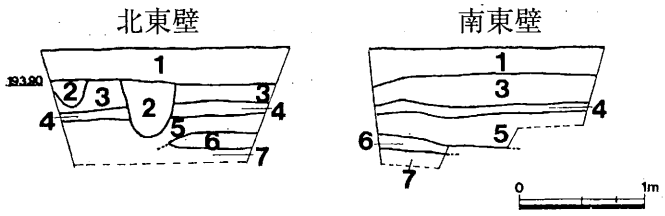
第６図　TP37（1/60）

1．耕作土
2．床土
3．暗灰褐色土
4．灰褐色土
5．黒褐色土
6．灰褐色土
7．褐色砂礫



第７図　TP40（1/60）

1．耕作土
2．床土
3．灰褐色粘質土
4．明灰褐色土
5．灰色土
6．淡灰褐色砂礫
7．灰色粘質土
8．灰色砂
9．褐色砂質土



第８図　TP44（1/60）

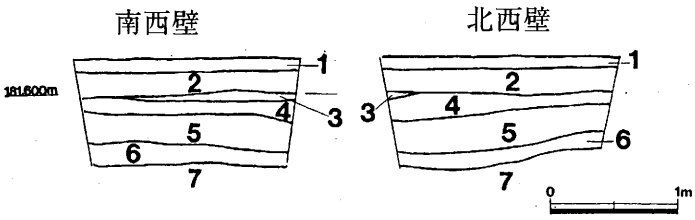
1．耕作土
2．暗渠
3．灰褐色土
4．灰色砂
5．暗灰色粘質土
6．淡灰褐色砂
7．暗灰色粘質土

色粘質土付近から須恵器片**3**が出土した。遺構はない。

ＴＰ５４～５８は標高１７８～１８０ｍの地点に設定した。いずれも遺構はない。遺物はＴＰ５７で近世以降の陶磁器が少量発見されたのみである。

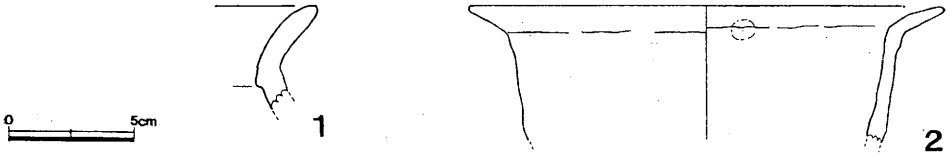
ＴＰ５９・６０は標高１８０ｍ付近に設定した。いずれも遺構はない。遺物はＴＰ６０で近世以降の陶磁器が少量発見されたのみである。ＴＰ５９では、耕作土直下から約５０cm以上の厚さで第４層淡黄灰色粘土がみられた。

ＴＰ６１は標高１７９．１０ｍの田面に設定した。遺構・遺物ともに未発見である。

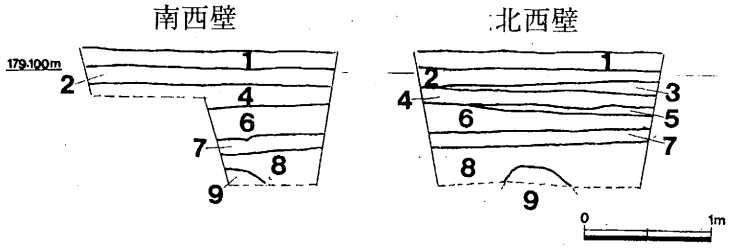


1．耕作土
2．灰褐色土
3．黄褐色粘質土
4．明灰褐色土
5．暗灰褐色土
（上半は下半に比べ暗い）
6．暗褐色土
（5・7層の漸移層）
7．褐色砂質土（地山）

第９図　TP46（1/60）

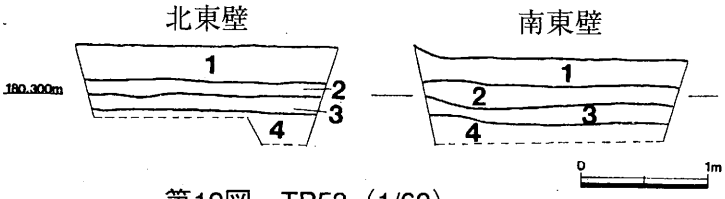


第10図　TP46出土遺物（1/3）



1．耕作土
2．灰色粘質土
3．淡灰色土
4．淡黄褐色砂質土
5．淡灰色砂
6．灰色粘質土
7．暗灰色粘土
8．褐色砂礫
9．灰色粘土

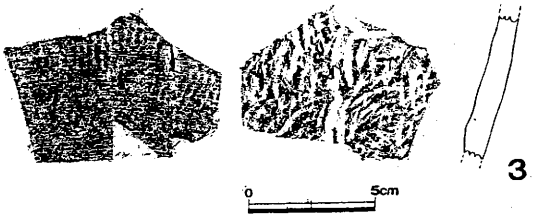
第11図　TP47（1/60）



1．耕作土
2．灰褐色土
3．暗灰色粘質土
4．淡灰色土
（非常によくしまる）

第12図　TP53（1/60）

ＴＰ６２・６３は標高１８１ｍ付近の田面に設定した。ＴＰ６２の北東の１８２．９０ｍの水田の字名が「堀」であることから中世の館の堀跡の一部の検出の可能性を考え調査に臨んだが、鉄分を多く含んだ湧水が甚だしく地表下約３０～４０cmで調査を断念してしまった。調査のかぎりでは遺構・遺物ともに発見できなかっ



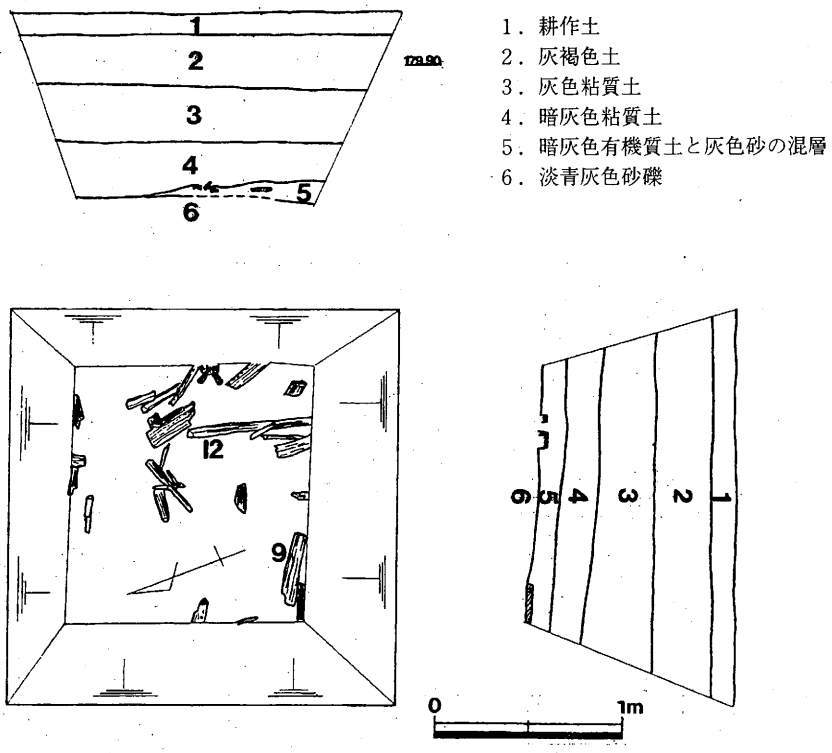
第13図　TP53出土遺物（1/3）

た。結果的には付近の調査区で中世遺物が少量しか発見されていないこと、及びこのあたりが瓦の土取り場であったと伝えられていることから、中世の館跡に伴う堀跡の一部である可能性は低いと考えられる。

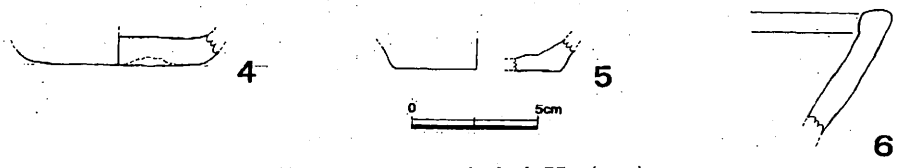
ＴＰ６４は周辺の調査区よりも一段高く、西方に突き出した標高１８１．００m付近の田面に設定した。床土以下は地山であり、遺構・遺物ともに検出できなかった。

ＴＰ６５は標高１７９．６５mの田面に設定した。耕作土以下は灰色粘質土、暗灰色粘質土となっており、遺構・遺物とも検出できなかった。

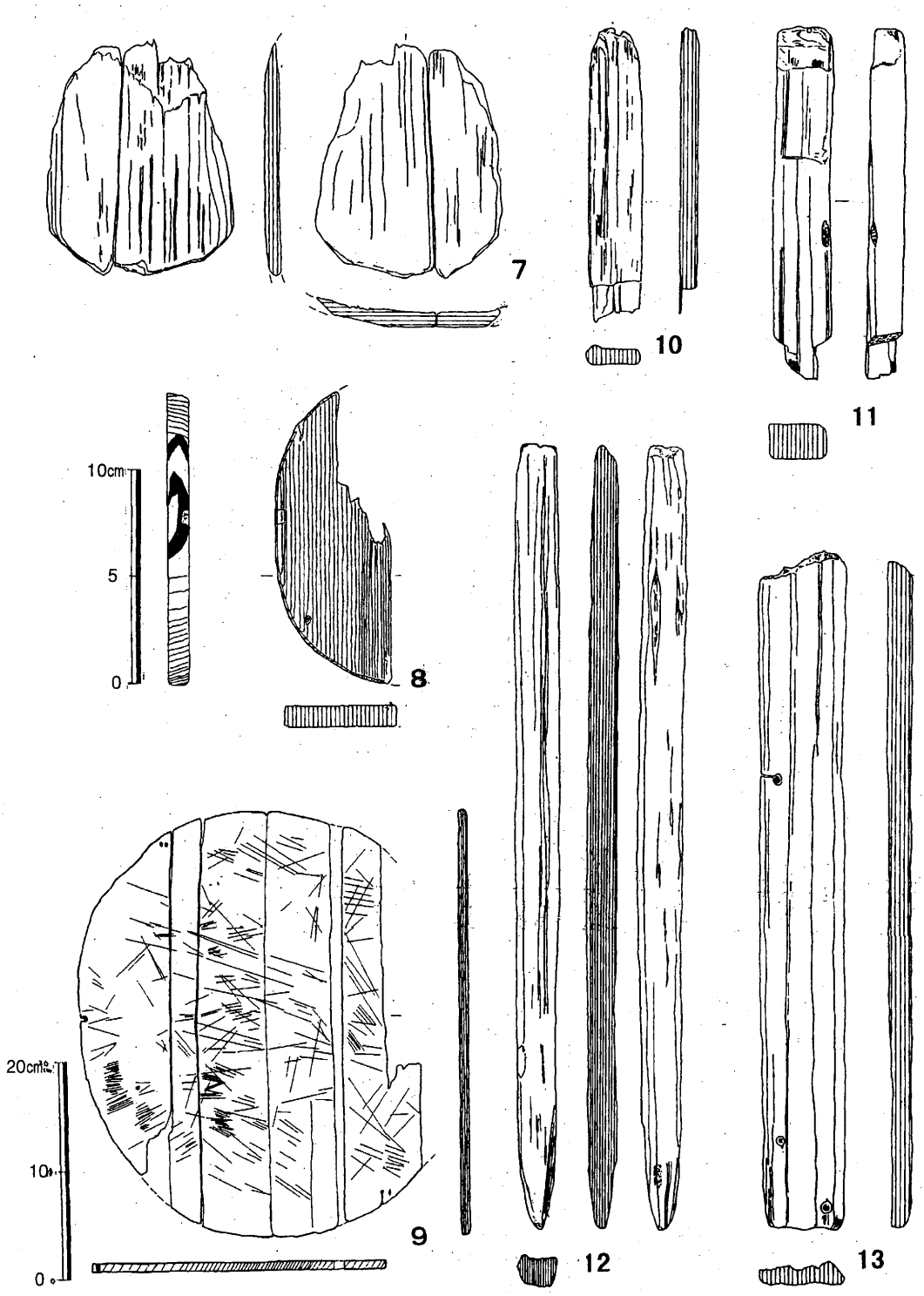
ＴＰ６６は東方からの台地が終わった裾部に設定した。遺構はない。第５層は中世の木製遺物包含層である。木製品に伴って中世土師質土器**5**が出土したが、遺物量は多くない。中世土師質土器**4**は第４層付近、中世瓦質土器**6**は第２～３層付近から出土した。木製品**7～13**は第５層中の出



第14図　TP66（1/40）



第15図　TP66出土土器（1/3）



第16図　TP66出土木製品（7･8･10･11･13：1/3,　9･10･10･12：1/6）

土である。**7**は杓子状のもの、**9**の片面には、鋭利な刃物による不規則な傷跡が多数確認でき、まな板として代用されたものか。掲載していないが他に、中世土師質土器口縁部が出土している。

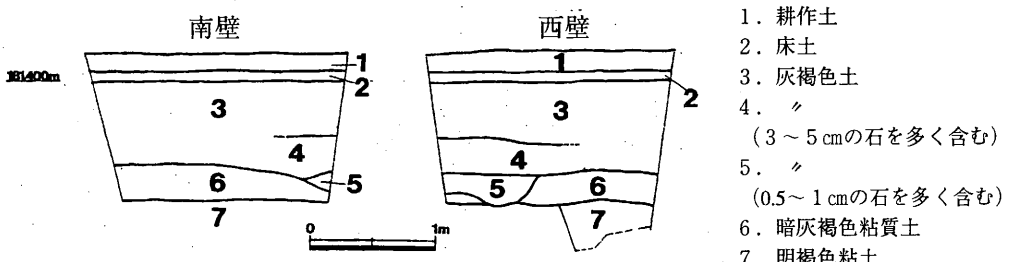
ＴＰ６７はＴＰ６５と同じ水田面の南西半に設定した。地表下約５０cmで砂礫と粘質土が互層状となる。遺構・遺物ともに無し。

ＴＰ６８は台地上面の縁辺部に設定した。床土以下は灰褐色土の厚い堆積が見られた。灰褐色土下端の第５層は深さ約３０cmくぼんでおり、遺構の一部と考えられる。第６層が粘質土であるためか、第５層の最下部からは湧水が見られた。第７層上面も遺構面である可能性を考え精査したが、遺構・遺物は検出できなかった。遺物は中世土師質土器が少量出土している。**１４・１５**は土師質の鍋・鉢類、**１６**は土師質の皿あるいは坏である。**１４**の体部には指頭圧痕が見られ、ススが付着している。第３層下半から**１５**、第３～４層から**１４**、第４層中から**１６**が出土した。

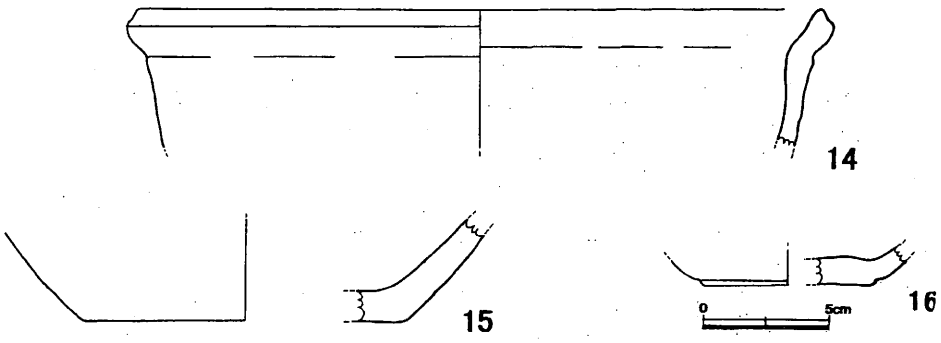
ＴＰ６９・７０は喜時雨川沿いの左岸に設定した。遺構はない。遺物はＴＰ７０より近世以降の陶磁器が少量出土したのみである。

ＴＰ７１・７２はＴＰ６９・７０より東方に１．５～２ｍ高い場所に設定した。いずれの調査区も床土以下は灰褐色土、褐色粘質土あるいは砂質土となる。いずれも遺構・遺物はない。

ＴＰ７３・７４はＴＰ７１・７２の東側、ほぼ同じ高さの場所に設定した。ＴＰ７３では地表下約３０cm、ＴＰ７４では地表下約５０cm地山となる。いずれも遺構・遺物はない。



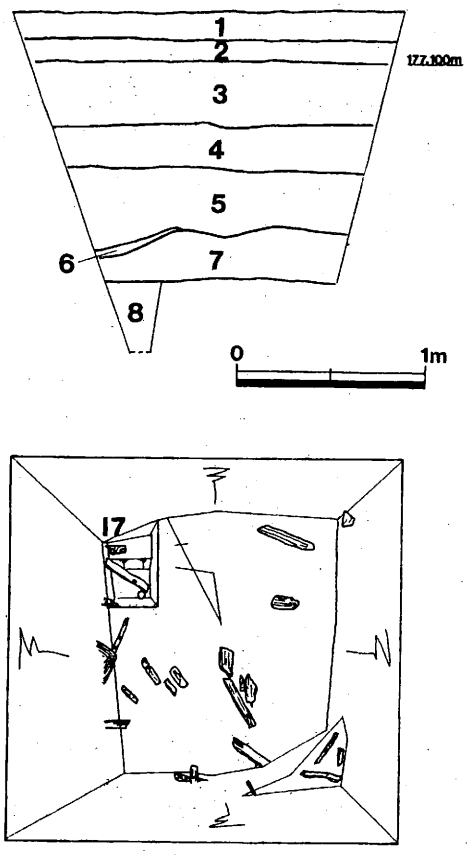
第17図　TP68（1/60）



第18図　TP68出土遺物（1/3）

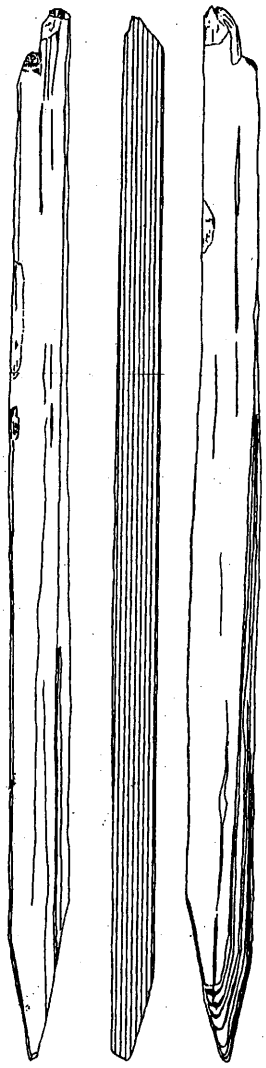
ＴＰ７５は東西よりはやや低い湿田状となったところに設定した。耕作土以下約５０cmは粘質土が互層状に堆積しており、褐色土、にぶい青灰色砂礫となる。遺構はない。遺物は第３層までのところで近世以降の陶磁器が少量出土したのみである。

ＴＰ７６もＴＰ７５と同様の東西よりはやや低い湿田状となったところに設定した。第５～６層にかけて木製遺物を包含していた。**１７**のように立った状態で出土した杭もあり、水田あるいは川岸にともなう遺構の一部であった可能性が高い。その時代は、他の遺物を伴っていないため明らか

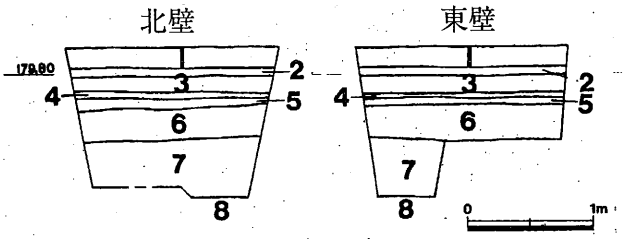


第19図　TP36（1/40）

1．耕作土
2．淡灰褐色粘質土
3．淡黄灰褐色土
4．灰褐色粘質土
5．灰色粘質土
6．灰白色粘土
7．黒灰色粘土
8．灰色粘土

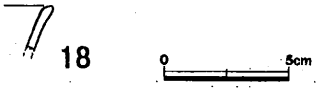


第20図　TP76出土木製品（1/6）

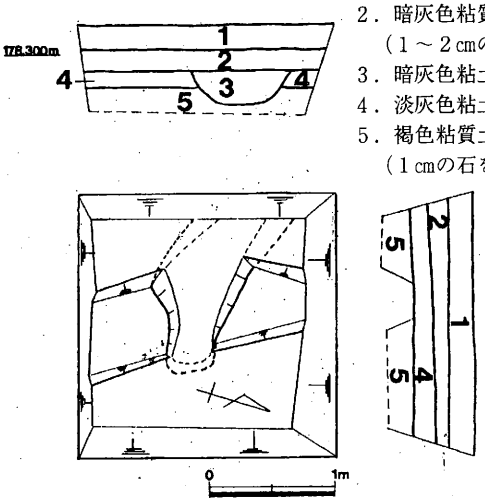


第21図　TP81（1/60）

1．耕作土
2．床土
3．淡灰褐色砂礫
4．灰色土
5．明褐色砂質土
6．暗灰褐色土
7．にぶい褐色土
8．暗赤褐色土

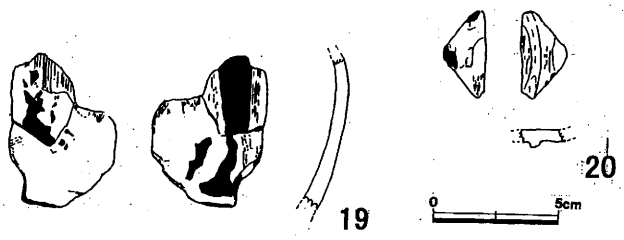


第22図　TP81出土遺物（1/3）



1．耕作土
2．暗灰色粘質土
（1～2cmの石を多く含む）
3．暗灰色粘土
4．淡灰色粘土
5．褐色粘質土
（1cmの石を多く含む）

第23図　TP82（1/60）



第24図　TP82出土遺物（1/3）

ではないが、東方で発見された弥生時代あるいは中世の遺跡に対応しているものと考えられる。

ＴＰ７７はＴＰ７６の南西部に設定した。地表下約８０cmで地山状の第６層淡褐色土となる。遺構・遺物は発見されていない。

ＴＰ７８～８０は通称「たて道」の南、次第に東方に高くなり始める場所に設定した。いずれも地表下約４０～８０cmで砂礫層がはじまる。遺構はない。いずれも耕作土・床土付近を中心として、近世以降の陶磁器が少量出土した。

ＴＰ８１はＴＰ７９の南側、ほぼ同レベルのところに設定した。遺構はない。第５・６層付近より**１８**が出土した。**１８**は縁反りの白磁口縁部である。

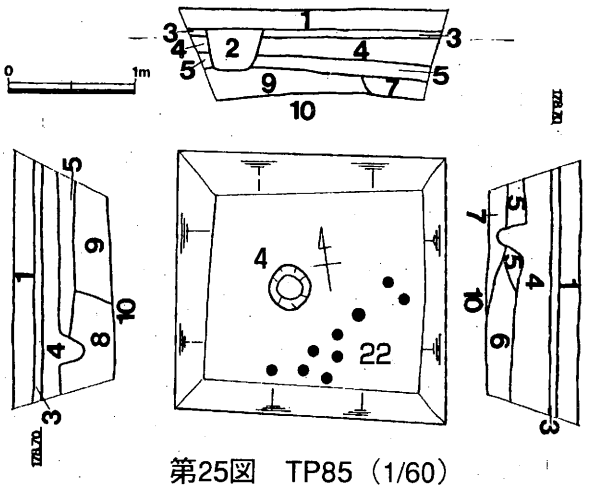
ＴＰ８２はＴＰ８０の南側、ほぼ同レベルのところに設定した。現在、この水田の北辺中央の畦に五輪塔空風輪部（田二穂泓石塔）が置かれている。この五輪塔空風輪部は、耕作者によると以前は水田中央に集石があり、その上に置かれていたという。水田耕作の際に都合が悪いことから、現在地に移動したということであったが、そのときには遺物は出土しなかったようである。今回の調査区は五輪塔空風輪部がもともとあった場

所を聞き取り、その地下に遺構が存在しているかどうかを確認するために設定した。調査の結果、第４層上面より掘り込まれた第３層を確認し、調査区外にさらに細長く続いていることが分かった。遺物は第２層付近からではあるが、黒色漆の漆器片**１９・２０**が出土した。なお掲載していない遺物として、第２層付近から出土した中世土師質土器皿口縁部、瓦質土器鍋口縁部がある。

ＴＰ８３はＴＰ８１の南側、ほぼ同レベルのところに設定した。床土上面から掘り込まれた桑株列の痕跡を確認したのみで、遺構はない。耕作土・床土付近を中心として、近世以降の陶磁器が少量出土した。

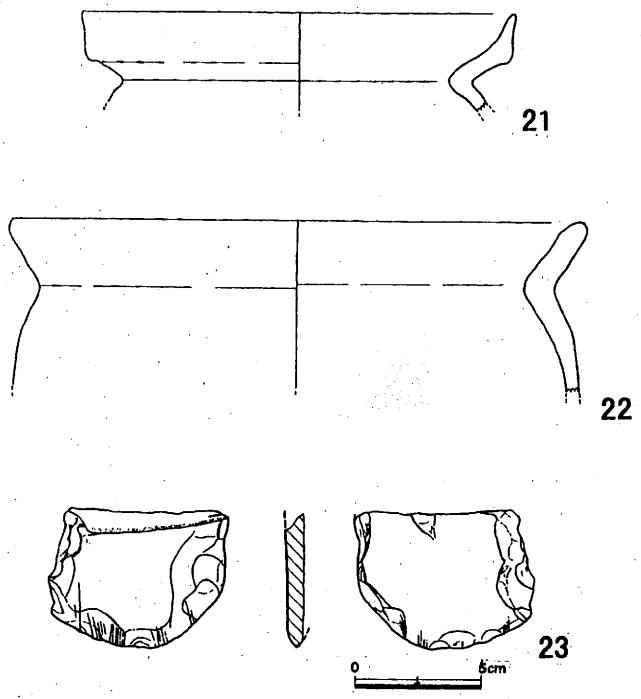
ＴＰ８４はＴＰ８２の南側、ほぼ同レベルのところに設定した。耕作土下は砂質土・粘土の厚い堆積がみられる。遺構はない。遺物は、耕作土より近世以降の陶磁器が少量出土した。

ＴＰ８５はＴＰ８３の南側、ほぼ同レベルのところに設定した。耕作土下面で桑株列の痕跡、第４層下面で中世期と考えられる柱穴状の遺構を確認した。遺構埋め土は第４層黒褐色土である。地山とみられる第９・１０層上面で竪穴住居跡などの大型遺構の縁辺部らしきものを確認し

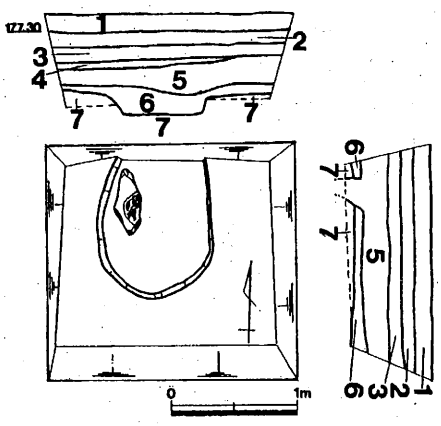


第25図　TP85（1/60）

1．耕作土
2．灰色土（桑株列痕）
3．床土
4．黒褐色土（０．５cmの石を多く含む）
5．暗褐色土
6．暗灰褐色土（０．５cmの石を多く含む）
7．灰褐色土
8．灰褐色礫混じり土（１～２cmの石多い）
9．淡灰褐色土
10．褐色土

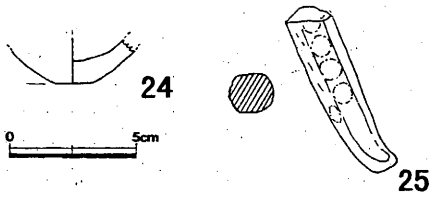


第26図　TP85出土遺物（1/3）

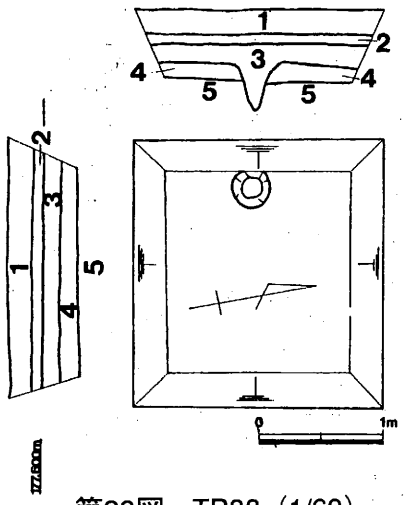


第27図　TP87（1/60）

1．耕作土　　5．暗灰褐色土
2．床土　　6．暗褐色土
3．旧耕作土　　7．褐色土
4．旧床土



第28図　TP87出土遺物（1/3）



第29図　TP88（1/60）

1．耕作土　　4．暗褐色土
2．床土　　5．褐色土
3．暗灰褐色土

た。これは、試掘坑壁の土層堆積状況および遺物の出土状況から判断したものである。遺構の輪郭は直線的なのか曲線的なのか、掘り過ごしてしまったため確認できなかった。遺物は第６・７・８層より**２１・２２・２３**が出土した。**２１・２２**はいずれも弥生時代後期から古墳時代前期にかけての甕である。**２１**は複合口縁、**２２**は単純口縁である。**２３**は使用痕が明瞭に残っている打製石斧片である。

ＴＰ８６はＴＰ７７の南東側、ほぼ同レベルのところに設定した。床土下は砂質土が厚く堆積している。遺構・遺物は発見していない。

ＴＰ８７はＴＰ８６の南東側、約９０cm高くなったところに設定した。第５層下面で柱穴状遺構、第６層下面で焼石の入った土坑を確認した。周辺の調査区の状況から前者は中世期、後者は弥生時代後期～古墳時代前期のものとみられる。**２４**は弥生時代後期の甕底部、**２５**は中世瓦質土器鍋の足である。このほかに、弥生時代後期～古墳時代前期の甕の複合口縁部片も出土した。

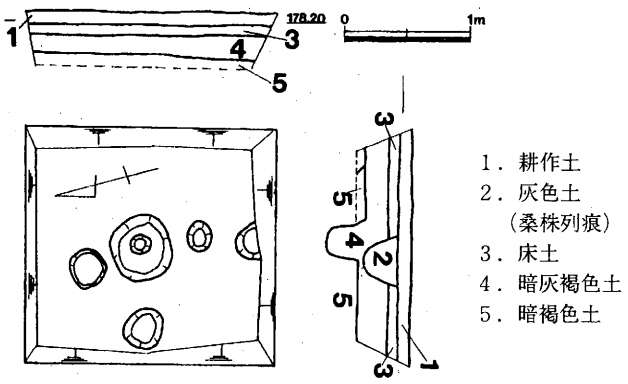
ＴＰ８８はＴＰ８７の東側やや高くなったところに設定した。第３層下面で柱穴状遺構１穴を確認した。遺物は耕作土から近世以降の陶磁器が少量出土したのみであるが、周辺の調査区の状況から第３層は中世期、第４層は弥生時代後期～古墳時代前期に対応するものとみられる。

ＴＰ８９はＴＰ８７の東側やや高くなったところに設定した。第１層下面で桑株列痕、第４層下面で柱穴状遺構５穴を確認した。柱穴状遺構内からは炭と中世土師質土器小片が多く出土した。**２６**は第４層上半、**２７**は第４層下半から出土した中世土師質土器片である。なお、第５層は一部しか発掘してい

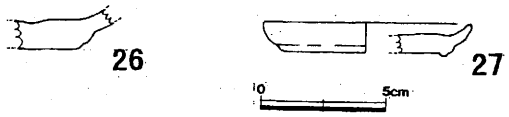
ないが、周辺の調査区の状況から弥生時代後期～古墳時代前期に対応するものとみられる。

ＴＰ９０はＴＰ８７～８９の南側に一段低くなったところに設定した。第３層下面で中世の柱穴状遺構を６穴程度確認した。第５層の地山がはっきりしているため遺構検出作業は容易であった。柱穴状遺構Ｐ１から**２９・３２・３４**、Ｐ２から**２８**が出土した。**３０・３１・３３**は第３層より出土したものである。**２８**は青磁椀底部、**２９**は中世瓦質土器口縁部、**３０～３４**は中世土師質土器である。なお、第４層が一部にみられたが、周辺の調査区の状況から弥生時代後期～古墳時代前期に対応するものと思われる。

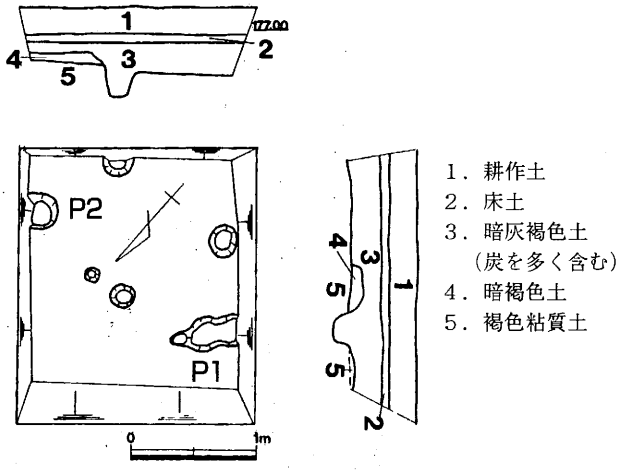
ＴＰ９１はＴＰ９０の南側にさらに一段低くなったところに設定した。第３層下面で土坑をともなった集石遺構（ＳＸ１）を確認したため、試掘溝を入れ一部を発掘した。ＳＸ１の底と想定される付近から鉄釘**３６・３７**が出土した。また、集石は周辺が高く、中



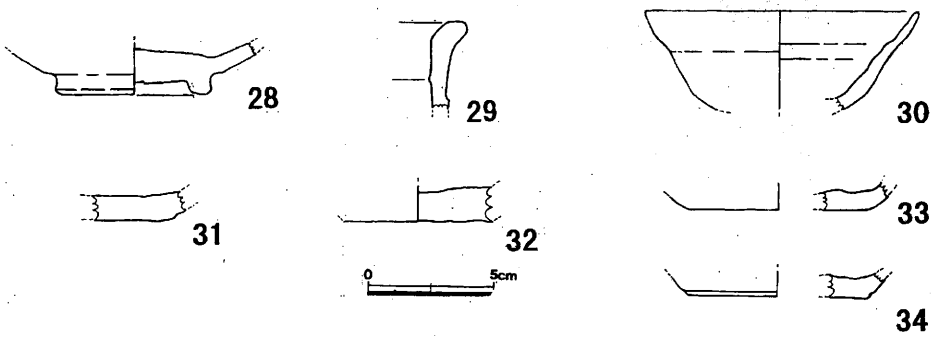
第30図　TP89（1/60）



第31図　TP89出土遺物（1/3）



第32図　TP90（1/60）

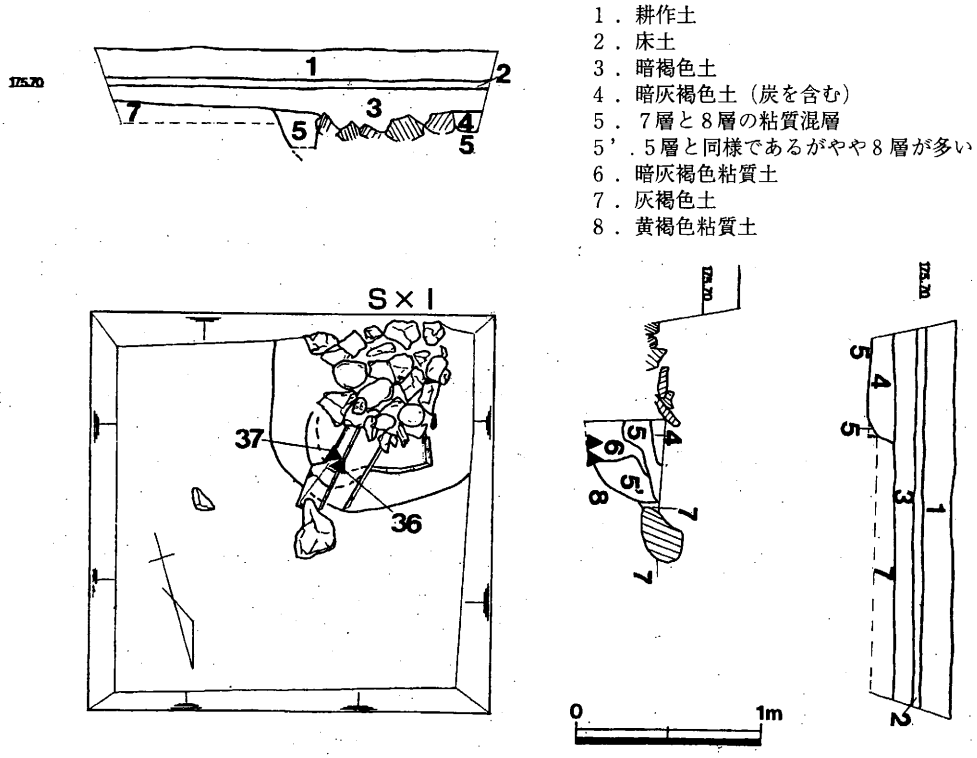


第33図　TP90出土遺物（1/3）

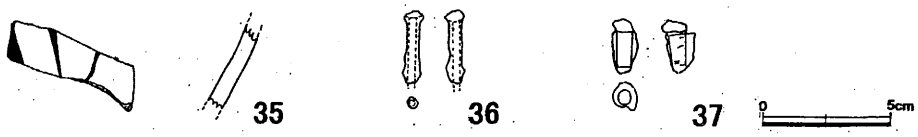
央部が低くなっており、個々の石も中央に傾いた状態のものが多く見受けられた。これらのことから、ＳＸ１は木棺墓の上に墓標として集石が置かれていたものと思われる。ＳＸ１内の第６層が棺内、第５’層が棺外に相当するものであろう。第３層からは、蓮弁文の一部がある青磁椀の胴部片**３５**が出土している。調査したかぎりではＳＸ１の時期ははっきりしなかったが、第３層がＴＰ９０などの中世包含層に対応しているとみなせば、中世のいずれかの時期にあたるのであろう。

ＴＰ９２はＴＰ９０の南西方向に設定した。地表下約６０cmで褐色土の地山となる。過去にはＴＰ９０方面から微高地状の地形が続いていたものと考えられる。遺構、遺物はない。

ＴＰ９３はＴＰ９０の南側、今回の試掘調査で最も低いところに設定した。床土下に大規模な現代の攪乱があった。地表下約４０cmで、淡褐色土の地山となる。遺構は発見していない。遺物は第



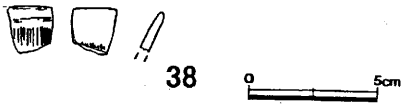
第34図　TP91（1/40）



第35図　TP91出土遺物（1/3）

4層暗灰褐色土あたりまでのところで**38**が出土した。

38は同安窯系青磁の口縁部である。



第36図　TP93出土遺物（1/3）

第1表　1996年度喜時雨地区試掘調査地一覧表

TP	所在地	字名	TP	所在地	字名	TP	所在地	字名
32	大字田二穂３４５	釜ケ溢上へ	53	大字田二穂１６３	中曽根	74	大字田二穂２２１	五助田
33	〃　〃	〃	54	〃　２２０-２	大名作り	75	〃　２２２	狭　間
34	〃　３４４	釜ケ溢	55	〃　１６３	中曽根	76	〃　〃	〃
35	〃　２８２	畑ケ田	56	〃　２２０-１	大名作り	77	〃　２２３-１	〃
36	〃　〃	〃	57	〃　１６２	兜	78	〃　５９	泓
37	〃　２７１	畑　田	58	〃　〃	〃	79	〃　６１	新　田
38	〃　２５６	斧　戸	59	〃　１６０	二反田	80	〃　５９	泓
39	〃　〃	〃	60	〃　〃	〃	81	〃　６１	新　田
40	〃　〃	〃	61	〃　１６２	兜	82	〃　５９	泓
41	〃　２５４	古屋敷下	62	〃　１５８	土　穴	83	〃　６０	大苗代
42	〃　〃	〃	63	〃　〃	〃	84	〃　５９	泓
43	〃　〃	〃	64	〃　１５７	新　田	85	〃　６０	大苗代
44	〃　３６０	堂ケ溢	65	〃　１５６	水　神	86	〃　２２４	柳ケ窪
45	〃　〃	〃	66	〃　〃	〃	87	〃　５８	道ノ下タ
46	〃　２６１-１	四通り	67	〃　〃	〃	88	〃　〃	〃
47	〃　２１８	コシマキ	68	〃　８２	〃	89	〃　〃	〃
48	〃　２１５	郷神田上エ	69	〃　２１９	サイシメン	90	〃　５７	新　田
49	〃　１６５	郷神田	70	〃　２２７-２	竹　添	91	〃　５６	佛ノ段
50	〃　〃	〃	71	〃　２２０-１	大名作り	92	〃　５５-２	六畝田
51	〃　１６４	中曽根	72	〃　２２６	竹添上エ	93	〃　３９	河原畑
52	〃　〃	〃	73	〃　２２１	五助田			

Ⅴ．小　結

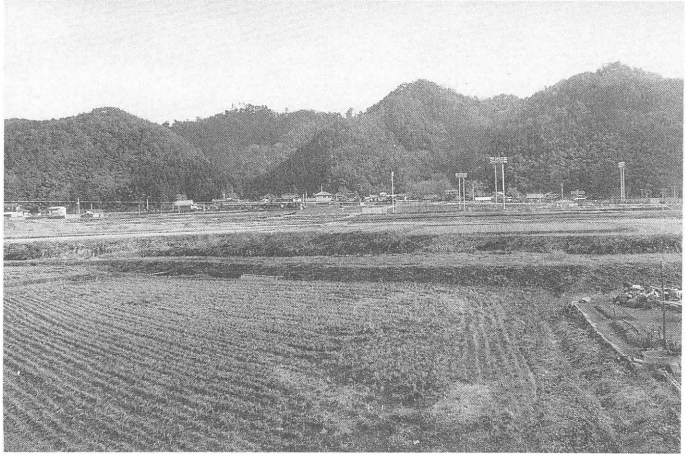
喜時雨地区北半のうち、今年度調査したＴＰ３２～３４、３５～３７、４４・４５の範囲については遺跡の範囲外であった。喜時雨地区北半の古代以前の主な遺跡は、昨年度調査区ＴＰ１６・１７付近の狭い範囲に限られるようである。

喜時雨地区南半は見た目には比較的平地の広がるところであるが、今回の試掘調査の結果、過去の地形は起伏に富んだものであり、この地形に制約されるかたちで遺跡が存在していることがわかった。喜時雨川西側に設定したＴＰ３８～４３は遺跡の範囲外であった。喜時雨川の東側は、津和野神社のある山から南にのびる微高地（ＴＰ５３～５８～７２・７４にかけての範囲）、津和野神社のある山と津和野城跡のある山塊との鞍部から南にのびる埋没谷（ＴＰ６２～６１～７７にかけての範囲）に大きく分割される。前者では地山が比較的浅い位置から検出され、後世に削平を受けていることがわかった。調査範囲東辺はＴＰ６４付近、及びＴＰ８１～８７～９２付近が東方の津和野城跡のある山塊から西方にせり出した丘陵の端部にあたる。

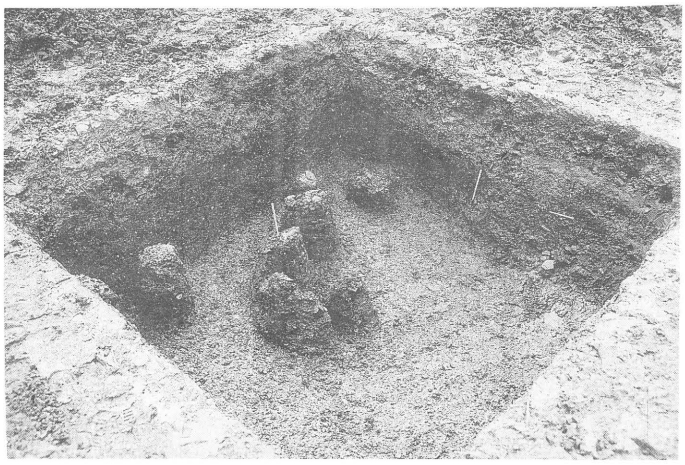
喜時雨地区南半の遺跡は、弥生～古墳時代と中世の遺跡に大きく分けられる。ＴＰ４６で弥生時代あるいは古墳時代の遺物包含層を発見したが、遺構の存在は確認できなかった。ＴＰ５３では須恵器片を発見した。北側丘陵の字名が「小丸子」であることから削平された古墳あるいは古代の遺跡が存在していることを示していると思われる。ＴＰ６６では中世の木製品包含層を確認した。これらはＴＰ６８より東方にあると予想される中世の遺跡からの流れ込み遺物と考えられる。またＴＰ７６では、打ち込んだ杭のある木製品包含層を確認した。詳細な時代は不明であるが、東方で確認した弥生時代後期あるいは中世のいずれかの遺跡に対応しているものであろう。ＴＰ８５・８７～９０では弥生時代後期・中世の２遺構面を確認した。弥生時代後期の遺構は地山直上の暗褐色土が埋め土で、ＴＰ８５の竪穴住居跡と考えられる遺構、ＴＰ８７の配石土坑があるが、中世遺構の下にはまだ未発見のものが存在しているものと思われる。中世遺構は暗灰褐色土が埋め土で、柱穴多数が発見された。ＴＰ８２では、五輪塔のあった場所の直下で土坑を確認した。発掘の際に漆器片が出土したことなどから、墓壙の可能性が高いと思われる。また、ＴＰ９１では集石墓を検出した。一部の発掘にとどめたため詳細は明らかでないが、「仏ノ段」という字名が調査地に残されていることと一致し、興味深い。この周辺のＴＰ９２付近には１６Ｃ代の特徴を持つ宝篋印塔[(1)]の相輪部・笠部（田二穂六畝田石塔）が残っており、このあたりの時期に集石墓の時期を推定することも可能であろう。

註１　間野氏の編年の３ａ類に該当する。

間野大丞1996「高津川上・中流域の宝篋印塔」『宍道町歴史叢書』第１号



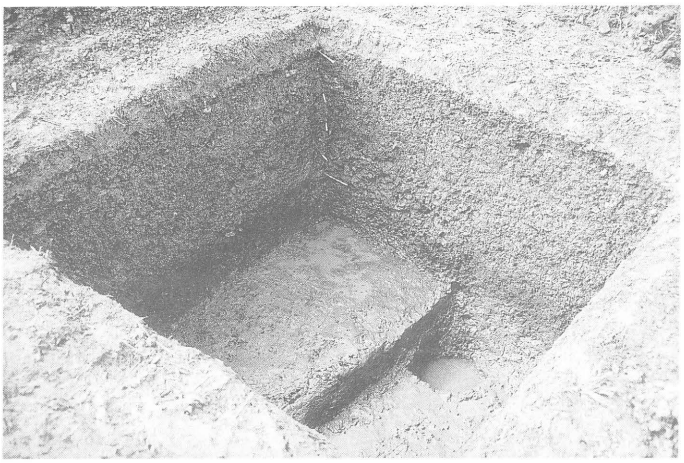
調査地遠景



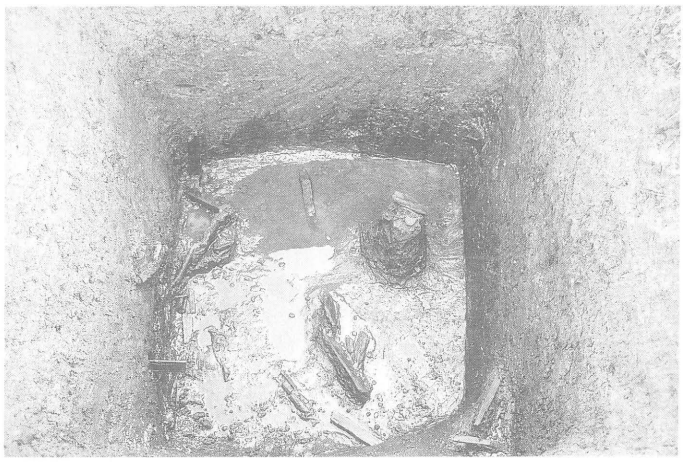
TP46遺物出土状況

TP66木製品出土状況

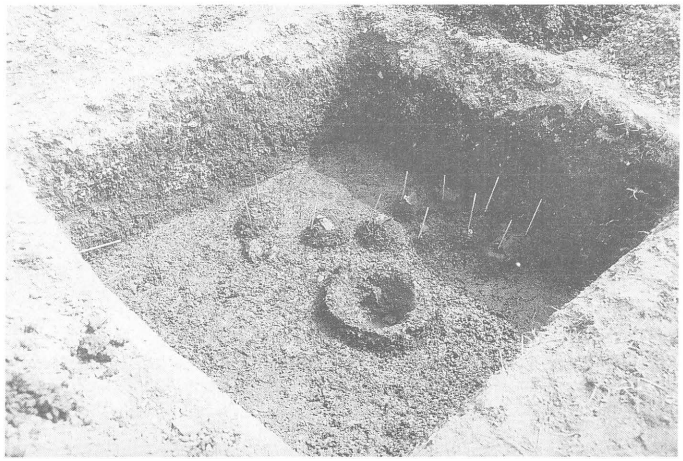
図版 2



TP68

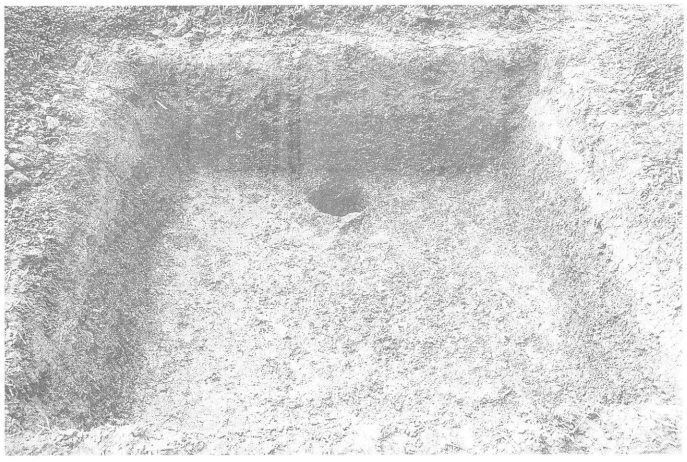


TP76木製品出土状況

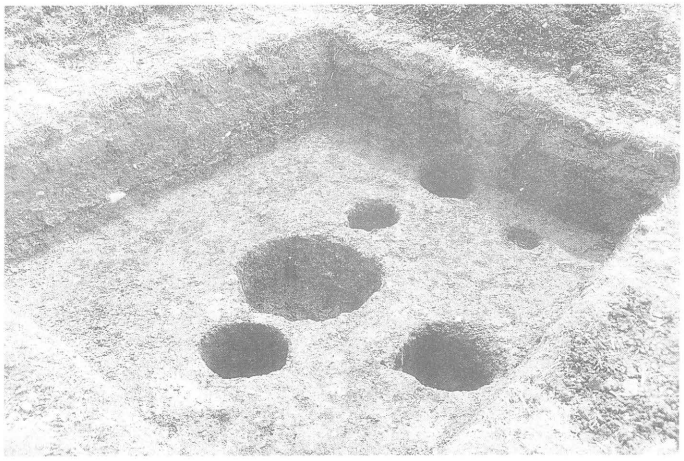


TP85上層遺構と下層遺物出土状況

TP87土坑完掘状況



TP88中世遺構完掘状況

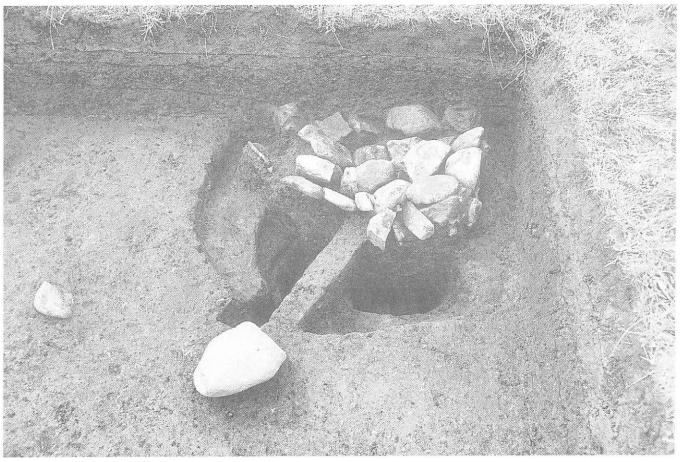


TP89中世遺構完掘状況

図版 4

TP90中世遺構完掘状況

TP91集石墓（S×1）検出状況



TP91集石墓（S×1）発掘状況

発掘作業風景

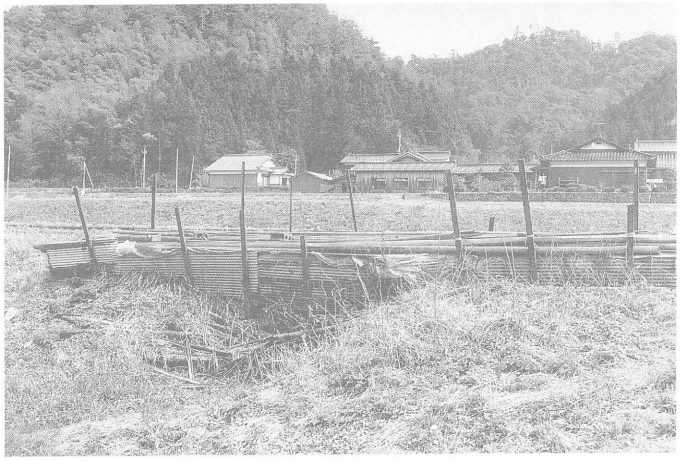
発掘作業風景

埋め戻し作業風景

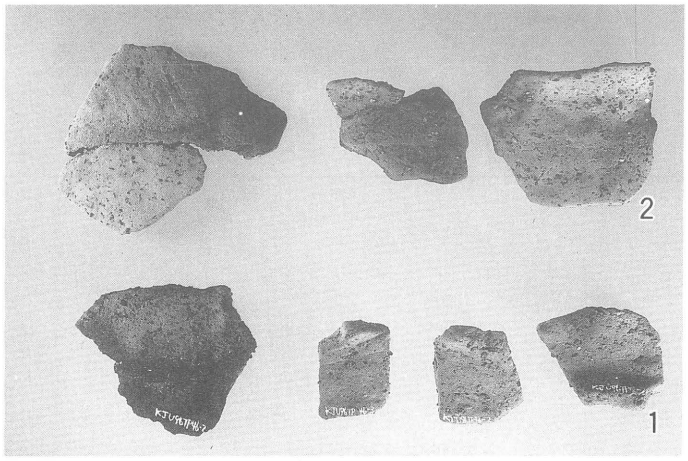
図版 6

五輪塔（田二穂泓石塔）

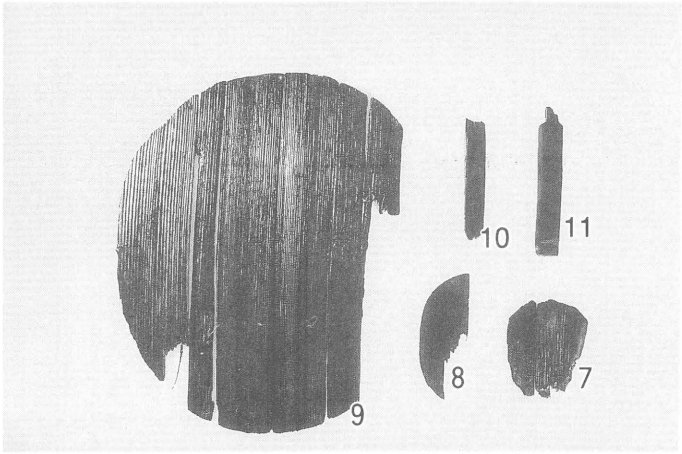
宝篋印塔（田二穂六畝田石塔）



字「水神」付近の現状



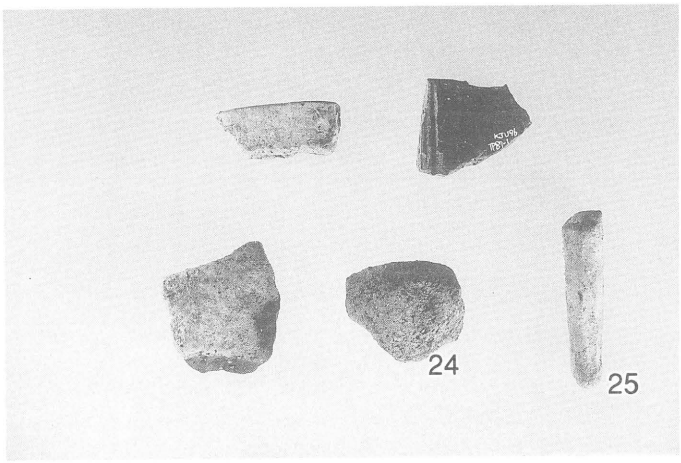
TP46出土遺物



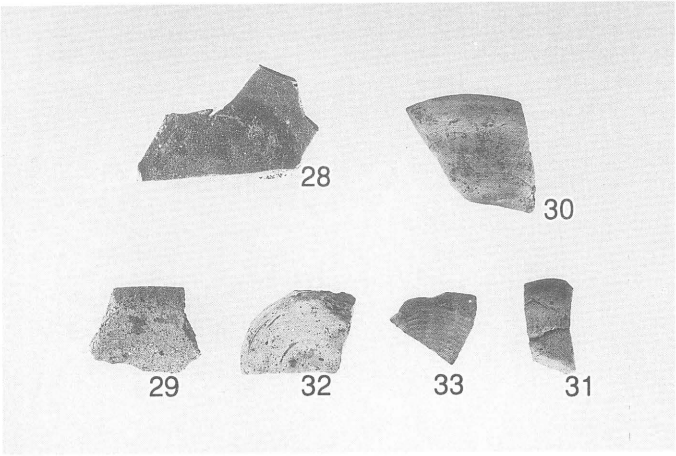
TP66出土木製品

TP85出土遺物

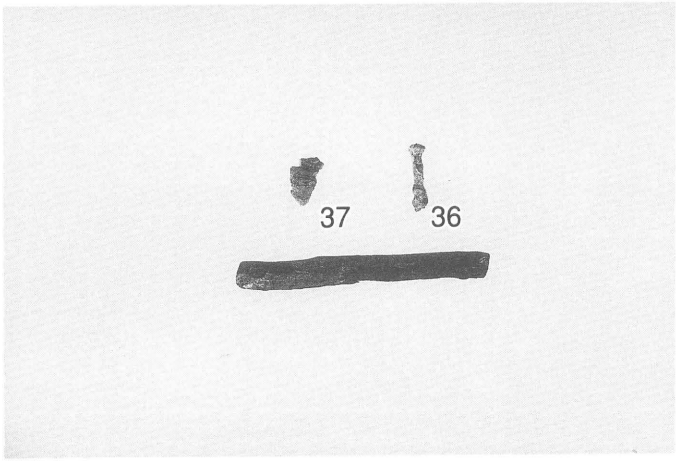
図版8



TP87出土遺物



TP90出土遺物



TP91集石墓（S×1）出土釘・炭

報告書抄録

ふりがな	きじうちくまいぞうぶんかざいしくつちょうさほうこくしょ
書名	喜時雨地区埋蔵文化財試掘調査報告書
副書名	
巻次	Ⅱ
シリーズ名	津和野町埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	
編著者名	宮田健一
編集機関	津和野町教育委員会
所在地	〒699-56　島根県鹿足郡津和野町大字森村ロ127　TEL 08567-2-0300
発行年月日	西暦　１９９７年３月３１日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
喜時雨（きじう）	島根県鹿足郡（しまねけんかのあしぐん）津和野町大字（つわのちょうおおあざ）田二穂（たにほ）喜時雨地区（きじうちく）	W	２０	34度27分30秒	131度45分27秒	19970123～19970318	２４８	遺跡範囲確認

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
喜時雨	集落跡	弥生時代後期 中世	竪穴住居跡 柱穴、集石墓	弥生土器 土師質土器 瓦質土器 貿易陶磁器 木製品	喜時雨遺跡の範囲を確認。

津和野町埋蔵文化財報告書
喜時雨地区埋蔵文化財試掘調査報告書Ⅱ

１９９７（平成９）年３月

発行　津和野町教育委員会
　　島根県鹿足郡津和野町大字森村ロ127
印刷　㈲坂田印刷
　　島根県鹿足郡津和野町大字後田ロ702

津和野町埋蔵文化財報告書

喜時雨地区埋蔵文化財試掘調査報告書 Ⅱ

一九九七　津和野町教育委員会